

研究結果

パンソリ「春香歌」を聞いた人は、歌い手ごとに異なる音楽性を発見することになる。「曾根崎心中」は広く知られた浄瑠璃であるが、文学の演劇性と歌舞伎の演劇性は本質的に異なる。異なるというのは、単純な差異点を述べているのではなく、公演の目標、表現方法、舞台の活用の仕方、表現道具など、一切の公演芸術的構造の差異を称しているのである。言い換えれば、韓日のパンソリと文楽が共に口承叙事文学から出発していながらも、多様なパンソリの流派、文楽と歌舞伎の流派を創出したのである。パンソリと浄瑠璃は劇的な秩序と構造を備えている点で、類似した口承叙事文学である。パンソリがパンソリ系小説に、浄瑠璃が浄瑠璃系作品（古浄瑠璃、御伽草子）を生み出すようになったことも類似した点である。しかし、パンソリは歌唱中心の舞台であった為、音楽的に発展し、浄瑠璃は朗唱中心の舞台であった為、人形と結合するのに適したと見ることができる。伝承・発展された地域的影響によってパンソリは湖南地域の語法を、浄瑠璃は大阪地方の語法を濃密に活用することとなった。パンソリ「春香歌」以前に春香民譚流あるいは春香雑歌流のようなものが伝承された時期は17世紀に遡ることができる。従来談話方式の物語を歌唱方式の物語として伝えるため、あらすじを語るやり方から劇的なやり方へと変わってきたのである。浄瑠璃は室町時代に作られた新しい音曲として、それ以前の平曲、簡単な歌、語り物などのような、雑多な芸能から形成されたものであり、琵琶の伴奏や扇拍子、拍子を伴った。1560年ごろに浄瑠璃の伴奏は琵琶から三味線に変わった。西宮夷神社を根拠とした夷かきという人形劇が浄瑠璃と結びつき、操り浄瑠璃が作られたのは1596年から1614年の間であった。操り浄瑠璃が1人での人形操作から3人による操作に転換したのは1734年であった。操り浄瑠璃を単純に「立体的な操作」ということは、どこかしら説明不足の感がある。「複数の人形の幻想的な調和」と表現することができるであろう。義太夫の切々たる語りと三味線の澄み切った、かつ美しい伴奏、そして人形の繊細な動きの総体的な調和は、文字通り渾然一体、物我一体と呼ぶことができる。幻想的な視聴覚のストーリーテリングである。江戸時代から操り浄瑠璃は歌舞伎の演目として作られ、また歌舞伎は操り浄瑠璃として再創作されながら、数多くの名作を生み出した。18世紀末、19世紀初にパンソリは数多くの名唱たちを生み出した。名唱の中でも10数名は国唱として特別の待遇をも受けた。同じ時期に貴族層は従前の単純聴衆から積極聴衆へと成長していった。彼らは、物質を前面に出したパンソリの高級需要者、後援者（パトロン）となり、パンソリの発展を支えた。一方日本の座は操り浄瑠璃を発展させるのに大きく寄与した。特に1730年から1760年の間の競争は操り浄瑠璃の黄金時代を作り上げた。明治時代に入り操り浄瑠璃は人形浄瑠璃という名称に変わった。文楽という言葉は、第3代植村文楽軒が1872年に官許人形浄瑠璃文学座という看板を掲げたことで、ジャンルの名称として一般化され始めた。座は興行を左右する中心勢力であった。入場料を受け取り作品を実演する興行は、日本の芸能制度を発展させる要件となった。これに比べ、韓国の芸能は興行ではなく寄付金や下賜金に依存した。入場料の収入に依存しない関係で、自然と制作態度が緩み、団体間の競争も熾烈ではなくなり、劇場設備を発展させることもできなかった。またパンソリには歌い手

と作者と作曲家の別が存在しなかった。既存の作品に歌手が自分の個性を加味した「トヌム」(「さらに伸ばす」という意味の「トヌリンダ」という表現に基づく言い回しで、独立した曲の意を表す)を付け加えて歌うことで、作曲行為を行った。このような方法はパンソリの創作的発展に支障を来たした。日本では座ごとに実力の高い座付作家を置くことで既存作品の発展はもちろん、創作が盛行するようになった。特に近松門左衛門は竹本義太夫と同年輩として、浄瑠璃作者として「日本のシェークスピア」と賞賛される人物である。パンソリを20世紀初めに伝統音楽劇として再創造しようとしたものが、今日まで伝承されている唱劇である。唱劇とは一般的に歌唱されるあらゆる歌を指すものではなく、パンソリを主材料としたものである。20世紀に入って文楽の経営が難しくなると、1910年、興行会社である松竹は文楽座を引き受けて支援した。パンソリにはこのような支援がなかった。1950年5月に日本の文化財保護法が制定された。この法によって、能楽、文楽、歌舞伎を含めた芸能は無形文化財として分類され、国家的な保護を受けるようになった。パンソリを保存するため1964年12月から重要無形文化財として指定し始めた。浄瑠璃と文楽、パンソリと唱劇は、口承叙事文学から出発し、長い歳月に変化と発展を重ね、今日に至った。一点惜しむべきことは、長い歴史にもかかわらず唱劇が古典的な音楽劇として独自の原理を確立しえていないことである。

研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表 (題名・発表者名・会議名・日時・場所等)

論文 (題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等)

題名：パンソリと浄瑠璃の現代化過程に対する比較研究
 発表者名：徐淵昊
 論文掲載誌：民族舞踊
 掲載時期：2008年5月頃

書籍 (題名・著者名・出版社・発行時期等)

題名：『東西公演芸術の比較研究』
 著者名：徐淵昊
 出版社：図書出版演劇と人間
 発行時期：2008年10月初版1刷
 (同書のうち、論文「パンソリと浄瑠璃の現代化過程に対する比較研究」が本助成事業に該当。)